

## 留学生と日本人学生の交流活動実践から見えてくるもの —「気づき」を通じた異文化間コミュニケーション能力の養成に向けて—

園 田 博 文

地域教育文化学部

奥 村 圭 子

山梨大学

内 海 由 美 子

留学生センター

黒 沢 晶 子

留学生センター

(平成17年9月30日受理)

### 要 旨

本稿は、異文化間コミュニケーションに関わる留学生と日本人学生の3つの交流活動の実践報告である。初めに、山形大学において、日本語研修コースの授業に日本人学生が参加した事例を紹介する。日本人学生は、留学生の発表の聴衆として質問したり、留学生のインタビューに答えるといった活動を通して、自らの日本語を見つめ直す機会を得た、と述べている。次に、山形大学で行っている「異文化交流会」の記録から、挨拶、非言語伝達、方言、若者言葉、子どもときの遊び等をテーマに話し合い、留学生、日本人学生ともに、普段気にとめずにいる事柄を意識化したり、考えたりするきっかけとしていく様子を観察する。最後に、山梨大学の留学生・日本人学生混在型授業「異文化間コミュニケーション」の報告では、ラーニング・ジャーナルを書くという活動を通して、いかに学生の学習の目的やプロセスに関する気づきや内省が促され、メタ認知知識が活性化されたかを論じる。さらに、自己モニタリング能力を高め、異文化間コミュニケーション能力を身につけるという到達目標がどのように達成されたかを考察する。

### 1 はじめに

山形大学と山梨大学では、平成16年度から、それぞれ留学生と日本人学生の交流活動を授業および課外のさまざまな形で行っている。各々の活動の形態と直接の目的は異なるが、いずれも、日常余り接する機会のない二者に交流の場を提供すると同時に、社会・文化的背景を異にする者同士のコミュニケーションを通じて、留学生と日本人学生双方に様々な気づきが生まれ、自らの言語・文化を見つめ、考える機会となっている。本稿では、山形

大学における「日本人学生が参加する日本語実使用のための教室活動」(第2節)および「異文化交流会」(第3節),そして、山梨大学での「異文化間コミュニケーションの授業」(第4節)の3つを取り上げ、学生が書いたレポートやラーニング・ジャーナルの記述を通して、これらの活動の意義と可能性を探ってみたい。

## 2 山形大学留学生センターにおける交流活動の取り組み<sup>1</sup>—日本人学生の参加による日本語実使用<sup>2</sup>のための教室活動について

留学生センターでは、「日本語研修コース(以下、研修コース)」という集中日本語コースを開講している。平成15年後期から初級(週16コマ)<sup>3</sup>が、平成16年後期から中級(週9コマ)<sup>4</sup>が開始され、平成17年9月に第4期生が修了した<sup>5</sup>。以下においては、研修コース初級を受講する留学生(以下、研修生)と日本人学生の交流活動について報告する。

尚、ここで述べる交流活動の目的は、留学生の日本語使用を通じた日本語習得である。また、本稿では教室内の報告にとどめ、教室外の活動は扱わない。従って、ここでの交流活動とは日本語学習における教室活動を指す。

### 2.1 教室活動の種類

研修コース初級ではこれまでインタビュー、スピーチ、シミュレーションを行った。初級で行ったシミュレーションは情報発信型で、広義のスピーチと考えられるため、これをスピーチに含め、スピーチとインタビューの2種類について報告する。

#### 2.1.1 スピーチ

コース中盤に、メインテキスト『みんなの日本語初級I』が終了したあたりで、「自己紹介」のスピーチを行う。準備には、原稿作成3コマ、発話練習1コマの合計4コマ(2週間)をかける。原稿は500字程度で、家族、趣味のふたつの部分から構成される。「書く」クラスではそれぞれの部分を書き、名前や所属を述べる最初の部分を加えてまとめ、ひとつの原稿とする。「話す」クラスでは原稿全体を通して検討し、誤用を訂正するとともに、ことば足らずの部分を書き足して内容を膨らませる。次の「話す」クラスでは原稿をもとにプレゼンテーションの練習をする。授業担当教員が発音に問題があって聞き手の理解を妨げると判断した者と、自分から希望した者には、教員が原稿を音読した録音テープを貸し出して、自宅で練習ができるようにする。スピーチの時間には、日本人学生を招き、留学生の自己紹介を聞いて質問やコメントをしてもらう。クラス終了まで時間がある場合は、研修生から日本人学生に質問するなど、全員でおしゃべりする。

コース最後には「旅行説明会」(シミュレーション)のスピーチを行う。初級クラスが旅行会社、コーディネーターが社長、研修生が社員となって、研修生は自国の一日ツアーをデザインしお客さんにプレゼンテーションする。研修生が作成するのは、プレゼンテーションの原稿(1500字程度)、旅行のパンフレット(A4×1枚、両面カラーコピー)、スライド(パワーポイント使用)の3種類である。準備には14コマ(5週間)を費やす。その項目は下記のとおりである。

- ・タスク内容と準備日程を理解する。

- ・以前の研修生が作成したパンフレットや原稿を見て活動全体のイメージをつかむ。
- ・日本語ワープロソフトの入力の仕方を学び練習する。
- ・パワーポイントの使い方を学ぶ。
- ・プレゼンテーションについて、工夫や注意点を話し合う。
- ・原稿を作成する。
- ・パンフレットを作成する。
- ・パワーポイントを使ってスライドを作成する。
- ・原稿とスライドの整合性を確認し調整する。
- ・原稿を読む練習をする。
- ・パンフレット、スライドを使いながらプレゼンテーションの練習をする。

研修生の課題は、「歴史を知るツアー」「自然遺産を巡るツアー」などテーマを持った一日ツアーをデザインすること、自国の単なる紹介にとどまらず、集客を促すという観点からツアーの内容やプレゼンテーションにさまざまな工夫をすることである。より具体性を持たせるため、一日のスケジュールだけでなく、集合場所、食事のメニュー、使用する乗り物、ツアーの価格、添乗員の有無、対象とする客層とキャッチコピーなども決めておかなければならない。これまでにデザインされたツアーには下記のようなものがある。

「ケーゾン市一日ツアー」(フィリピン)

「バンコクへ行かなければぜったいにわからない」(タイ)

「マレーシア文化と美食の旅」(マレーシア)

「北京一ツアー」(中国)

この他に取り上げられた場所は、ソウル、濟州島、慶州(韓国)、瀋陽、大連、珠海、泰安、長春(中国)、タブリーズ(イラン)、ダッカ(バングラディシュ)等。

プレゼンテーションは、研修コース終了直後の発表会で行う。来聴者は、日本人学生、指導教員、日本語教員などである。初級のプレゼンテーション開始時には、初級コーディネータが旅行会社社長として「ツアー説明会」開会の挨拶をし、シミュレーションの雰囲気作りをする。この後、来聴者は「海外旅行に興味のあるお客さん」という役割を演ずることになり、ツアーの説明を聞いて質問したりコメントしたりする。

## 2. 1. 2 インタビュー

コース中盤以降に、インタビューを行う。留学生が日本人学生に質問して答えてもらうという教室活動である。留学生は前の週の「話す」クラスで質問項目を準備し、ペアで練習する。その際、一問一答の尋問調にならないようにするため、ひとつの話題を発展させる質問、あいづち、聞き返しの仕方について意識化する。当日は、日本人学生にインタビューをすると同時に、聞き出した情報をメモし、後日、「話す」クラスでわかったことを発表するという流れである。留学生が扱ったテーマは、日本人学生の一日の生活パターン、アルバイトの経験などである。

## 2. 2 日本語学習における特徴と意義

### 2. 2. 1 スピーチ

教室活動としてのスピーチには、準備に時間がかけられる、活動時に日本語のコントロー

ルがしやすいという特徴がある。日本語使用の観点から考えると、学習した日本語、話したい内容に即した日本語の使用を準備段階から促すことができるため、研修生が使う日本語のバリエーションが広がると同時に活動時の誤用が少なくなる傾向がある。

スピーチ自体は一方向であり、双方向のコミュニケーションはスピーチ後の質疑応答に限定される。また、自己紹介から日本人学生が得る情報の必要性や重要性が高くないため、情報のやりとりも活発化しにくい面がある。しかし、日頃、日本人学生と接触する機会の少ない研修生にとっては、授業担当教員以外の日本人に対して日本語を使用し、自己表現をする機会として評価できる。また、準備したことと実際のずれが小さいことから、情意面での負担が比較的少ない活動でもある。

上記の特性を生かしつつ、「本当のコミュニケーション」を促進する目的で、シミュレーション「旅行説明会」を実施しているが、日本語使用以外に「お客さん獲得」という課題が設定されることから活動のタスク性が明確になるとともにゲーム性が高まり、研修生にとっては、テーマを深めさまざまな工夫を凝らす動機付けとなっている。また、内容が来聴者の日本人を引きつけるもので、儀礼的ではない質問が多数寄せられ、活発な質疑応答が行われる。中には実際の旅行を想定しているかのような、内容的に突っ込んだ質問もあり、同国の研修生同士が助け合って答える姿なども見られる。発表会後の感想用紙には「旅行したくなった」「〇〇に行きたくなった」などの感想が多く、情報のやりとりを目的とした双方向のコミュニケーションが成立していることがうかがえる。

## 2. 2. 2 インタビュー

インタビューは、情報を得ることを目的にした双方向のコミュニケーションを実践できる教室活動である。また、コミュニケーション・ストラテジーも含めて、統合的日本語力が問われる活動でもある。特に初級段階では、質問をしてその答えを聞き取ることで精一杯の研修生が多く、尋問調に陥るのを避けるためには、ひとつの話題を発展させるためのあいづちや質問、相手の日本語がわからないときの聞き返しのストラテジーなど、事前に準備すべき項目は多い。その一方で、相手の話す日本語や内容等、予測できない要素が多く、準備したことが実践できるとは限らない。この特徴は緊張を生み情意面でのストレスを高めることになる。しかし、日本人学生と本当のコミュニケーションをした、知りたいことを聞いたという達成感は大きい。また、このときに日本人学生から得た情報をもとに、母国の学生にインタビューして比較し、最終発表のスピーチに発展させた学生もあり、日本語実際使用だけでなく、日本を知る機会にもなっていることがわかる。

## 2. 3 日本人学生にとっての意義

スピーチ、インタビューに参加してもらった日本人学生には感想用紙にコメントをお願いしている。そこに書かれたコメントから、交流活動の日本人学生にとっての意義を考察する。

スピーチに対する感想によると、日本人学生はこの活動を、留学生と交流する機会、異文化を知る機会ととらえていた。

### ①留学生と交流する機会

- ・お友達になりたいです。

- ・これを機会に友達になりたいと思いました。
- ・交流できてよかったです。
- ・こんなに身近なところで国際交流ができるとは思わなかった。

## ②異文化を知る機会

- ・韓国と日本の違うところがよくわかった。

本学には165名(平成17年7月現在)の留学生が在籍しているが、日本人学生にとっては、留学生と接触する機会があまりないようで、留学生との交流を希望して日本語クラスへの参加に協力する日本人学生が少なくない。また、留学生のスピーチが「自己紹介」「旅行説明会」をテーマにしていることから、日本人学生にとっては、結果的に異文化を知る機会になっていることがわかる。

インタビューに対する感想にも、留学生と交流する機会として評価するものもあるが、それ以上に、自分の日本語を客観的に見直す機会として、参加者の全員が評価している。

## ③自分が使っている日本語を客観的に見直す機会

- ・普段使っている日本語をわかりやすく使うのが思った以上に大変でした。
- ・優しい日本語で話そうとしてもうまく伝えられなかったりして、己の未熟さを思い知りました。
- ・簡単な言葉で言うのが難しくて、なかなか答えられず申し訳なかった。
- ・もっといろいろなことについて意見を交換してみたいと感じた。
- ・私が日本語をうまく説明できなくて考え込んでしまう場面が多々ありました。どう説明すればわかってもらえるのか考えさせられ、私自身も勉強になりました。

日本人学生にとって、インタビューは情報提供の場である。研修生の質問に答えて情報を提供する際、共通の背景知識が少ないことから、日本人同士なら説明しなくてもすむ事柄までも言語化しなければならぬ。また、相手の日本語力に合わせた日本語を使わなければ、コミュニケーションに支障をきたすことになる。このように、言語化の必要性を判断する、日本語を意識的に使い分けるといった経験がほとんどの日本人学生にとっては初めてのことで、自分の日本語が通じないことにとまどうと同時に、日本語を振りかえる機会になったものと思われる。また、コミュニケーション上の日本語の問題を、研修生の日本語力の低さを原因として片付けるのではなく、自分の日本語を振り返る機会と見なしている日本人学生の姿勢は評価したい。

コミュニケーション能力を高めるには、ことばを使いこなす力、自分の使うことばをモニターする力の獲得が重要だが、この教室活動は、日本人学生にとってもコミュニケーション能力を構成するスキルを高める機会になりうることを、上記のコメントは示唆している。

## 3 山形大学地域教育文化学部における「異文化交流会」の実践研究

### 3.1 「異文化交流会」の概要

平成16年度後期には、「日本語Ⅶ(上級会話)」「(教養教育科目・留学生対象)のクラスに「日本語教授法」(教育学部および人文学部開講科目)を受講している日本人学生を招き、「日本語教育演習」(大学院教育学研究科開講科目)のクラスに「日本語Ⅶ」を受講している留学生を招くことで、一時的に留学生と日本人学生の混在授業を創り出すことにし、計4回「異

文化交流会』<sup>6</sup>を開催した。毎回、参加した学生に感想・提案等を書いてもらい、学期末には複数の選択課題の中に「異文化交流会」に関するレポートも加えた。これらの学生の感想・提案・改善案をもとに「異文化交流会」はどうあるべきかについては既に論じている<sup>7</sup>。

本節は、半年の試行結果を踏まえ、平成17年度前期に開催した5回分の「異文化交流会」についてまとめたものである。

### 3. 2 教員が企画・運営した「異文化交流会」

第5回(平成17年度第1回)から第7回(平成17年度第3回)の「異文化交流会」は、いずれも授業時間外に地域教育文化学部2号館3階23演習室(45m<sup>2</sup>)で開催したものである。平成16年度後期にこの教室の半分の広さの教室(22m<sup>2</sup>)で行った際、留学生から「狭すぎると気分がよくないと思う」という指摘があったため、広めの教室を確保した。参加人数については、「15人程度」「日本人学生、留学生ともに4～8人程度」「日本人学生と留学生が半々」といった状況が理想的であるとして学生の提案に多く挙げられていたが、実際にこれに近い状況になったのは第6回のときであり、今回書かれた感想から受ける印象からも相応しい状況であったことが確認できた。

#### 3. 2. 1 「こんにちは！」と言いますか？(第5回)

【開催日時】平成17年5月31日(火) 16:20-17:00

【参加者】日本人学生6名(J<sup>8</sup>1～J<sup>6</sup>)、留学生2名(F<sup>9</sup>1～F<sup>2</sup>)

- 【ねらい】① ごく身近な挨拶表現にも異文化性が潜んでいることに気づいてもらう。  
② 留学生だけが戸惑う問題ではなく、同じ日本人でも使い方が異なっていること(個人差・世代差等)を認識する。  
③ 日本語教育でどう扱うかについても考える。

【テキスト】『外国人の疑問に答える日本語ノート第1巻』<sup>10</sup>(「日本語ノート5 こんにちは」)

日本語ノートと同じく午後2時という設定にして、大学内でその日初めて会った場合、学生はなんと挨拶するのであろうか。この問題に関連するものとしては既に先行研究があり、最近のものでは国立国語研究所編(2005:80-81)<sup>11</sup>に以下のような質問が載っている。

最近、午後でも『おはよう』というあいさつを耳にすることがあります。『おはよう』は朝のあいさつの言葉だと思うのですが。(80頁)

これに対しては、最近の実態調査の結果や、この挨拶行動が現れた背景について説明した後で、以下のように結んでいる。

人が期待したようなあいさつをしないと、違和感を持ったり、場合によっては不愉快に感じたりすることもあるかもしれません。しかしそのような経験を、言葉の背景にある価値観や配慮のありようについて考えるきっかけとして、とらえることもできるでしょう。(81頁)

「異文化交流会」でも、誰が誰にどういう場面でいつ用いるかを考慮しながら、現在の日本における状況はどうであるかを話し合った。「私はこんにちはという機会の方が多いと思いました」(J<sup>5</sup>)という感想がある一方で、「高校の部活で先輩に会ったら『おはようございます』とあいさつするきまりだったので、いつでも『おはよう』と言うようになっ

てしまった」(J 6)という事例も紹介された。留学生からは、「日常生活中にはいろんな細かいところがあるので、理解するのは難しい。たとえば、『おはようございます』の場合、最初は理解できませんでした」(F 1)とあるように、現在かなり多く(調査によっては約8割)の学生が昼夜を問わず「おはよう(ございます)」と言うことがやはり不思議に感じられたようである。以下、日本人学生の感想をふたつ紹介する。「初めてこういった会に参加して、人それぞれ違うなあと感じました。この文にあるように『こんにちは』とは一体何のためにあるのだろうと、F 2さんからの疑問を聞いて日本語について考え直しました。普段なにも気にしないで使っていたけれども、外国人の人からしてみると何故という場面が多いのだろうと思いました。でも、異文化?を知れた感じがして楽しかったです」(J 1)。「『こんにちは』や『おはよう』も人によってそれぞれ使い方や使う場面が異なっているように思った。この時に使うということは決められないし、無意識にあまり考えず、あいさつをすることの方が多と思う。これからは、留学生側から見た疑問や共通点なども知っていきいたいし、そういうことについて、日本人として、それぞれどう思うかということなども話し合えたらいいと思う」(J 2)。書物からの知識では知っていたことかも知れないが、留学生からの問いかけにより、初めて、日本人同士でも日本語使用に多様性があるということを意識化でき、熟考する機会が与えられたというべきであろうか。日本人学生を中心とした「おはよう(ございます)」使用の意識、これに対して、「こんにちは」を意識しないで使える者と意識しないでは使えない者との間にある異文化性、このあたりは、まだまだ考察すべきことが多いように感じられる。

### 3. 2. 2 非言語伝達について－その1・その2(第6回・第7回)

【開催日時】平成17年6月14日(火)16:20-17:00(第6回)

【参加者】日本人学生6名(J 1~J 4, J 7, J 8), 留学生6名(F 1~F 6)

【開催日時】平成17年6月28日(火)16:20-17:00(第7回)

【参加者】日本人学生4名(J 1~J 4), 留学生1名(F 2)

【ねらい】① 非言語伝達について個人差を超えた違いや共通点の存在に気づく。

② 東アジア文化の共通点についても考える。

③ 日本語教育でどう扱うかについても考える。

【テキスト】『日本語教育学シリーズ第2巻日本語行動論』<sup>12)</sup>(「第5章世界の行動表現と非言語伝達」<sup>13)</sup>)

望ましいと思える人数構成になった第6回を中心に見ていきたい。

参加者が日本人学生6名、留学生6名になり、空席がない状態だったので、少し多いのではないかとの印象を持ったが、学生の感想を見ると、相応しい構成になっていたことがわかる。留学生の出身国も中国、韓国、マレーシア、ラトビア、カナダというように多岐に及んだ。

日本人学生の感想は以下のとおりである。「今回は前回よりも色々な国の人達が参加しておもしろかった」(J 1)。「今回は前回よりも多くの留学生が来てくれたので、より多くの国での手ぶりや身ぶりを知ることができて楽しかった」(J 2)。「毎回このぐらいの人数が集まって、いろいろな話ができたらいいなと思いました」(J 3)。「今回の交流会は、留学生の方々がたくさん来てくださって、楽しかった」(J 4)。これらの感想からは、様々

な国からの留学生が参加してくれたことに対する感謝の気持ちが窺える。「ジェスチャーが文化によって異なることは、少し知っていて、興味があり、とても有意義な時間だった。日本人の中でも違いがあるように、他の国でもバラつきがありそうだと思う」(J 7)。「大して変わらないのでは?と思ったが意外に違うことが多くもっと他のジェスチャーも知りたいと思いました」(J 8)。予想していた以上の違いを感じたという感想がある一方、同じ国(均一だと思われている文化)の中での違いに注目するものも見られた。

留学生の感想を見てみよう。「いろいろな国の人がいて、交流ができて、とてもたのしかったです。もっと、いろいろな国のジェスチャーが知りたいです」(F 1)。「いろいろな国の人が集まって、意見を出しておもしろかった。話題もおもしろくて、ほかの人を<sup>14</sup>聞くのは楽しかった。最近『日本人っばい』ことをしない日本人がいると分かった」(F 2)。「自分の国と日本だけでなく、多国からの参加者もいたの、面白かったです。また、日本の習慣といわる行動が最近日本人でももうやらなくなるのはとても興味ぶかかった」(F 6)。実はテキストの内容について「今の日本では考えられないこともある」と指摘する日本人学生もあり、時代的変遷や世代差も考慮に入れたうえで、今後更に深く考察すべきであろう。

「いろいろな国のジェスチャーの意味の違いを聞いて、普段、無意識でやる自分のジェスチャーについて考えることができ、とてもおもしろかったです」(F 5)。「来日もさん年あったから、自分自身が無意識的に日本のしゅうかんを身に付けたから、あまり自分の国と日本の違いを分からなくなってきた」(F 3)。「いろいろな国の事情が聞けて、おもしろかったです。しかし、日本の習慣に慣れて、韓国でどうするのが普通なのか忘れてきたところも多くて、あまりいい答えはできなかつたと思います」(F 4)。このように、留学生自身も余り意識することなく日本のジェスチャーを身に付けている実態があるようである。上記3名の感想は、アジアからの留学生のものであるが、欧米からの留学生からも、似たような指摘がなされることもある。

### 3. 3 学生が企画・運営した「異文化交流会」

前回までの7回は、すべて教員の側で企画・運営を行ったものであるが、第8回と第9回は学生が企画・運営すべてを行う形をとった。シラバスで、「日本語教育法概論」<sup>15</sup>(平成17年度前期教育学部および人文学部開講科目)の後半の時間を異文化理解に関する講義とし、徳井(2002)で試みられた「現場発信型、実践重視型」の授業を展開していた。折しも地域教育文化学部文化創造学科異文化交流コースが行うオープンキャンパスにおける「大学授業の体験学習」に「異文化交流会」を行うことが決まり、受講生<sup>16</sup>にこの企画案を出してもらうことにした。30を越えるテーマ及び企画案が提出されたが、その中で、詳細に企画し、かつ、当日都合のつく学生2名に第8回(平成17年度第4回)と第9回(平成17年度第5回)の司会進行をそれぞれ依頼することとなったものである<sup>17</sup>。以下に、パンフレットに掲げた内容を示す。

「日本語教育法概論」(平成17年度前期人文学部・教育学部開講科目)受講生の企画による「異文化交流会」を開催します。「異文化」とは自分の文化(自文化)と異なる文化のことです。地域差や世代差等様々な観点から「異文化」を考えることが出来、窮極的には一人一人異なった文化的背景を持っていると言えます。「異文化交流会」では、「違い」を尊重しながら、下記のテーマについてみんなで一緒に考えてゆき



ます。

(午前)テーマ：方言と若者言葉(日本語の地域差と世代差)について

(午後)テーマ：子どものときの遊びと時間のすごし方について

開催場所は教養131番教室という十分に広い教室である。参加した高校生や高校教諭の方にはその場で感想を書いてもらい、企画・運営に携わった学生(7名<sup>18)</sup>)にはレポートを提出してもらったので、これらをもとに分析を進めたい。

### 3. 3. 1 方言と若者言葉(日本語の地域差と世代差)について(第8回)

【開催日時】平成17年8月6日(土) 11:20-12:00

【参加者】日本人学生6名(J1, J7, J9~J12), 留学生2名(F3, F7), その他7名(S<sup>19</sup>1~S7)

【ねらい】自主的に企画・運営することにより何らかの「気づき」体験をする。以下、司会学生(J9)のレポートから、目的および方法について見てみよう。

目的：① 自分が使っている方言を意識する。

② ほかの参加者と自分の間の方言使用の違いに気づき、方言から異文化を体験する。

③ 高校生と大学生の間の若者言葉の違いを探る。

④ 楽しく交流する。

方法：配付資料<sup>20</sup>に挙げられている東北方言や若者言葉の一例を参考に、自分が使用していることばを認識する。その後、ほかの参加者とそれぞれの方言や若者言葉について話し合い、異文化を体験する。

参加した高校生(6名)及び高校教諭(1名)に書いてもらった感想を留学生(F3)が分かりやすくまとめたものを見てみよう。

① 同じ地域、同じ地方でも違う方言があって、驚いた。

② 自分が普段に使っていた方言がほかの県でも使われて驚いた。

③ いろいろな方言を聞いてよかった。そしてこの模擬授業はおもしろくて楽しかった。

④ 外国のことも色々知りたいけど、まず、自分たちの身近な異文化のことを知るのが大切と思う。

⑤ 方言の面白さと大切さを実感していた。

この留学生自身、「留学生である私にとって方言はちょっと難しかったが、皆が方言に熱中する様子を見て面白かったと思う。そして、普段に標準語とおもって使っていたことばが方言だったということが驚き、それに留学生である私だけではなく日本人も同じ勘違いをしたのは面白く思っていた」(F3)と記している。他の学生のレポートからは以下のような記述が見られた。「同じ国で同じ地方でも同じ日本語かと思うくらいに違いがあって、方言はとてもおもしろいと感じました。私は、異文化交流会において必要なことはもっと自分を知り、積極的に発言することだと思いました。今回の実行委員の方のように私ももっと自分の考えや文化を相手にしっかり伝えられるようにしたいです」(J1)。「違いだけでなく、異文化間で共通する要素を探ることも必要だったのではないだろうか」(J12)。「今回の異文化交流会の企画・運営は、自分にとっても異文化体験だった。この体験で得た見

識をこれからも生かしていきたい」(J12)。

### 3. 3. 2 子どものときの遊びと時間の過ごし方について(第9回)

【開催日時】平成17年8月6日(土) 15:20-16:00

【参加者】日本人学生5名(J7, J9~J12), 留学生2名(F3, F7), その他3名(S8~S10)

【ねらい】自主的に企画・運営することにより何らかの「気づき」体験をする。

以下、学生(J9)のレポートから、目的および方法について見てみよう。

目的：堅苦しくない和やかな交流会にする。

方法：参加者一人一人に名札をつけ、フレンドリーな雰囲気交流する。

参加者が子どもの頃にしていた遊びを実践して楽しい時間を過ごす。

同じく、学生(J10)のレポートから準備の状況について見ると、以下のようになっている。

- ① 交流会の内容、流れは司会者のレポート<sup>2)</sup>に沿って行う。キーワード「疲れるけどついしていた遊び」「室内でしていた遊び」などを設定理由の欄に付け加えたり、足りない部分を補う。
- ② ゴム跳びの実演をするために、ゴム跳びのゴムを購入し準備する。
- ③ 自分がどのような遊びをしていたか考えておく。
- ④ ネームプレートの用意。

司会学生(J11)からは、「初めての異文化交流会運営体験」として様々な角度からの考察が為された後、次に生かしたい点として以下のように述べられている。

- ① テーマ選びはいろいろな視点から推敲し、選ぶ。
- ② 事前に流れを知るために内輪で実際にやってみる。
- ③ 自分たちのグループ以外の人話し合いに積極的に参加できるように、スタッフ一人一人が意識する。

予め参加人数が予想できないことから、多すぎた場合の対応等考えなければならず企画はかなり大変だったと思われるが、工夫した点への気づきは、以下の指摘からも察せられよう。「全体を通して参加人数が丁度良く、話し合いなどをスムーズに行うことができた。ネームプレート作成や、輪になる席、自己紹介には高校生の緊張を解く効果があったと思う。『異文化交流』とは海外との関係だけではない点に気づき、地域間の差、世代の差、個人の差など様々な『異文化』が存在していることを高校生は意識してくれたようである」(J7)。

### 3. 4 まとめと今後の課題

以上、平成17年度前期に開催した5回分の「異文化交流会」を中心にまとめたが、これらは、今後、異文化交流コースで行われる「異文化交流(留学生交流)セミナー」等の実践的な教育を視野に入れて実施したものである。今回は、予めねらいを設定し、会の雰囲気や学生の感想(自由記述式)およびレポートの記述を参考にしながら、どの程度ねらいが達成されたのか考察する方法を採った。本節では、レポートや感想のごく一部を載せるに留まったが、自ら企画・運営することから得られたものを窺い知ることが出来るであろう。

特に、学生が企画・運営して行った第8回と第9回における7名の学生のレポートからは、うまくいった点、うまくいかなかった点、予想通りであった事柄やそうでなかったこと、反省点等々、率直な感想が述べられていた。今後は気づき等について客観的に捉える指標について考察を深めていきたい。

#### 4 山梨大学参加型授業におけるラーニング・ジャーナルに見られる体験的異文化理解

山梨大学留学生センターでは、平成15年12月に留学生と日本人のディスカッション・グループ「話そう会」<sup>22</sup>を作り、異文化間コミュニケーションの場を提供し始めたが、ちょうどその頃から異文化理解関連科目の設置への要望が学内で高まっていた。その要望に応える形で、留学生センターの共通科目「異文化間コミュニケーション」は、本学初めての留学生と日本人学生混在参加型授業として、平成16年度前期から提供されている。大学教育の国際化が提唱される昨今、留学生の日本への異文化適応教育として、また日本人学生の国際的な視野に立つコミュニケーション教育として、このような異文化理解教育は重要な意味を持っていると言えよう。授業では、異文化間コミュニケーション理論の紹介を行いながら、さまざまな学生参加型の活動を通して、①学生自身の自己モニタリング力を高めること、②異文化を自国以外の文化圏の人との関係の枠組みの中だけでなく、性別、年齢、職業、環境の異なる人々を含む広いフレームの中でとらえ、スムーズにコミュニケーションする力を社会的スキルとして身につけること、の二つを到達目標としている。

本節では、平成17年度前期を例にあげ、授業活動の一環として取り入れたラーニング・ジャーナルにおける参加学生自身の気づきや意識化された学びを通して、参加学生相互の人間的な接触と一過性ではない異文化理解について考察し、異文化理解の学習プロセスを知ることにより、授業の意義を検討したい。

##### 4.1 共通科目「異文化間コミュニケーション」の概要

最近、大学教育の中に留学生をリソースとして積極的に生かすという意図から、「異文化理解」の授業でも留学生と日本人学生の混成クラスを構成するケースも増えている(八若2004:13)。体験を通して視野の拡大、相互理解の促進、新たな自己の発見、コミュニケーション能力の向上など、留学生と日本人学生の双方に教育効果が見られることが検証されている(細川1999, 田崎2003)。Mead(2005)は、課題を与えられた際の多文化混成グループで生み出される創造力と問題解決能力は、時間は要するものの単一文化のグループによるものよりも優れていることを論じている。

平成17年度前期に履修した学生は計43名で、その内訳は表1のとおりである。

留学生20名の出身国は、マレーシア9名、中国7名、台湾1名とオーストラリアからの短期交換留学生3名であり、日本人学生は23名である。留学生20名のうち17名までが1年生であるのに対し、日本人学生は11名が1年生、残りは2年生から4年生までが数名ずつ参加している。出身国に偏りはあるものの、性別、年齢、学ぶ分野もさまざまな、まさに土屋(2000)<sup>23</sup>のいう「多文化クラス」であると言える。

表1. 平成17年度前期「異文化間コミュニケーション」参加学生数

所 属	留学生	日本人学生
教育人間科学部	4名 (男1・女3)	15名 (男8・女7)
工学部	15名 (男10・女5)	5名 (男4・女1)
医学部	---	3名 (男2・女1)
医学工学大学院 (聴講生)	1名 (男1)	---
計	20名 (男12・女8)	23名 (男14・女9)

共通科目「異文化間コミュニケーション」の授業は表2に示されるように、週1回、14週に亘って行われ、最後の2週はグループ・プロジェクトの発表に充てられる。毎週の授業活動は、まずその週のテーマに関していくつかの仮想場面を与えられ、どう考えるか、どう行動するかといった問いかけを通して、個人もしくはペアで自己モニタリングを行うことから始まる。次に講義形式の異文化間コミュニケーション理論の紹介を交えながら、グループ・ディスカッション、ロール・プレイ、インタビューなどの活動を、毎週グループの構成メンバーを変えながら実施している。授業での使用言語は基本的には日本語であるが、キーワードの解説や自己モニタリングのやり方についての細かい説明などは、適宜英語でも行っている。教員は教卓には着かず、グループの周りを回りつつ学生の様子や反応を見ながら講義をし、グループ・ディスカッション時にはファシリテーター役を演じる。6週目にグループ・プロジェクトのためのグループ・メンバーが決められ、7週目以降は90分授業のうち30分ほどがグループ・プロジェクト発表の準備に使われる。プロジェクトに関しては、課外にも時間を合わせてグループ単位の発表準備が毎週行われている。

表2. 「異文化コミュニケーション」授業スケジュール

第1週	4月12日	オリエンテーション
第2週	4月19日	「はじめまして」相手を知ろう
第3週	4月26日	新しい常識発見
第4週	5月10日	文化とコミュニケーション
第5週	5月17日	コミュニケーションのスタイル
第6週	5月24日	言語コミュニケーション
第7週	5月31日	非言語コミュニケーション
第8週	6月7日	価値観と文化的特徴
第9週	6月14日	自分を知ろう
第10週	6月21日	異文化間コミュニケーションのスキル
第11週	6月28日	カルチャー・ショックと異文化適応
第12週	7月5日	異文化適応トレーニング
第13週	7月12日	グループ・プロジェクト 発表1
第14週	7月19日	グループ・プロジェクト 発表2

この科目の成績評価には平常点60%、つまり出席(15%)、授業での参加度(15%)、課題レポート(15%)、ラーニング・ジャーナル(15%)と、自己評価とピア評価を含むグループ・

プロジェクト発表に対する評価の40%が考慮され、総合的な評価が出される。ラーニング・ジャーナルが評価に占める割合は決して高くはないが、ラーニング・ジャーナルに表れる学生の内なる声は、参加学生の異文化理解の学習プロセスを知る大きな手がかりとなる。

#### 4. 2 なぜラーニング・ジャーナルなのか

##### 4. 2. 1 ラーニング・ジャーナルとは

「異文化間コミュニケーション」の授業の中で取り入れられたラーニング・ジャーナルについて説明する。そもそもラーニング・ジャーナル(学習日誌)は、看護医療や心理学、医学などの分野でよく使われるが、McCrinkle and Christensen(1995)はラーニング・ジャーナルについて、「学習者自身の学習内容に関する認知プロセスの内省の機会を与え、学びの目的やプロセスに関して気づきを促し、学習の概念を理解する機会を与え、メタ認知ストラテジーの使用を促すものだ」と言っている。つまり、効果的な学習のために学習者は認知ストラテジー及びメタ認知ストラテジーを使うが、ラーニング・ジャーナルはそれらのストラテジーを活性化させる道具だと見ている。

Dickinson(1992)の示す例をあげると、学習者が10語の単語を覚える場合、大きな声で何度も読む、何度も書くという反復で覚えるのも一方法、実際に部屋に存在する対象物に単語を貼り対象物と単語を関連させて覚えるのも一方法であろうが、目的を果たすためにどのようなテクニックでその課題に取り組むかが学習者の認知ストラテジーである。一方、メタ認知ストラテジーとは、課題は何であるかを認識し、それにあった認知ストラテジーを選択しモニターしながら、そのストラテジーが効果的な学習に結びついているかどうかの自己評価をする過程で行う学習管理、あるいは調整のために使うストラテジーのことである、とDickinsonは定義する。

McCrinkle and Christensen(1995)が述べるように、上述のラーニング・ジャーナルを書くことによって生まれる内省を通して、これらのふたつのストラテジーが相互に作用し、より効果的な異文化理解学習を目指せるのではないかと筆者は考える。

##### 4. 2. 2 「異文化間コミュニケーション」の授業での実践方法

異文化間コミュニケーションの深層構造とも言うべき異文化接触に際して、倉地(1991)は学習者の心的過程を重視した教育法開発の必要性を説き、自己表現の拡大を進めるジャーナル・アプローチ<sup>24</sup>を提唱している。その実践原則として、下記の3点を挙げている。

- ① 自発的な自己表現を奨励するため、ジャーナルを毎日書かせたり、あるいは字数を定めるような規則や制限は設けずに提出期限までに記述させること
- ② 学習者の語学力に対する劣等感や過ちを恐れることによって表現欲求が抑制されないように配慮する。そのために作文指導でやるような評価や、添削、訂正などは行わないこと
- ③ 個人のプライバシーを相互に尊重することを示しておくこと

これらの点に留意して、「異文化間コミュニケーション」の第1週目の授業のガイダンスの際、「ラーニング・ジャーナル」を形成的評価<sup>25</sup>のひとつと位置づけ、「授業の中での自分の学びや体験を客観的に捉えて意識化し、自分を省察し、自分、他者、グループとの

コミュニケーションの方策を模索すること」を目的とすることを履修生に説明した。

「異文化間コミュニケーション」の授業の中での新しい発見、気づき、感動などを自由に、英語または日本語のうち自分が書き易い言語で書くためのノートを、学生全員に一冊ずつ渡した。授業の最後に15分ほどの記述の時間を設け、その間に書き終えない場合には翌週の授業で提出することとし、学生は自由なペースで書き進めることができる。個々の学生の記述に対して、読後何らかのフィード・バックを書いて、できるだけ早急に返却することを原則とした。毎週提出されていれば「可」のレベルとし、それに加え内省の質と記述内容の質的变化に関して評価を行った。個人のプライバシーは守られる旨も明確にした。

#### 4. 3 ラーニング・ジャーナルの実際

##### 4. 3. 1 異文化の意味と学びの目的

第1週に、「あなたにとって異文化とは」、「なぜ、この科目を履修したか」、「この授業で何を身につけたいか、何を期待するか」の3つの問いに答える形で自由記述をしてもらった。これは、学生各人に学びの目的に関して気づきを促すものである。

異文化を「言語、地域、生活習慣や価値観によって違う文化」と答えたものが留学生20名中9名、日本人学生23名中15名であった。そのほか「自文化とは異なる未知の文化」とするものが日本人学生の8名で、その中の日本人学生2名は、「近くにあるが何かよく理解できないもので、何か似ている部分もあるだろうもの」、「今まで見えていなかった部分を教えてくれるもの」と、異文化を広いフレームワークで捉え、抽象的な未知のものとなししている。一方、留学生の10名が「自分の国や地域以外の文化」と国や地域のボーダーラインを文化の<sup>きわ</sup>と二次元的に限定して解釈しているのが特徴的である。

学習目的について、「他の国の文化や習慣を知りたい」(留学生(以下Fとする)10名、日本人学生(以下Jとする)6名)、「日本について学び、生活の役に立てたい」(F4名)、「国際的な視野を広げ自分を大きく成長させたい」(J3名)と、知識やスキルを求めて履修をしている。しかし、それ以上に「留・日の混在授業に参加して友人になりたい」、「相互理解をしたい」と考える学生が24名(F8名、J16名)で、通常なかなか接触する機会のない異文化を背景にもつ学生との交流を大きな履修の理由としているのが注目できる。そのほか、「自文化を外から見直す」(J3名)、「留学生が日本をどのように見ているか知りたい」(J3名)と、長い間享受してきた自らの文化を客観的に見るチャンスとしたい学生もいる。また「自分の考えを話せるようになりたい」(J5名)、「自分の行動範囲を広げたい」(J4名)と自己啓発の場としたい学生も見られる。一方留学生の半数近く(8名)が、日本語運用力や英語力を伸ばすことを副次的な目的として挙げている。

「この授業で何を身につけたいか、何を期待するか」の問いには、異文化に対する正しい知識や理解、異文化に触れる勇氣、外国人的な価値観、新しい発見、日本と緊迫した関係にあるアジア諸国からの留学生との交流、とさまざまな前向きな回答が得られた。

##### 4. 3. 2 「メタ認知知識」の意識化とその具体例

第2週以降からは学習を振り返るラーニング・ジャーナルの活動を始めたが、活動を通して、学生が、自分自身の学習についていかなる知識、つまり前述のメタ認知ストラテジー

につながる知識を得ているかを観察する。Wenden(1991)は、この知識を「メタ認知知識」と呼び、自律的学習の枠組みの中で活性化を促し、学習成果に対する期待に影響を及ぼす知識であると考えている。その知識を①「Person Knowledge」(学習を促進、または妨げる人的要因、具体的には学習動機、態度、年齢、認知スタイル、学習スタイルなど情意的・認知的知識)、②「Task Knowledge」(タスクの目的、性質、要求していることについての知識)、③「Strategic Knowledge」(学習のプロセスにおけるストラテジー全般についてその有用性や使い方についての知識)の3つに分類している。Wendenは、この3つのメタ認知知識は学習者が幼少時から習得した知識の一部であり、これらが意識化されることによって、活性化され、学習に重要な役割を果たすと指摘している。気づきや内省を促すラーニング・ジャーナルは、正にその意識化のために使用されるのである。記述の作業を通して、学生たちの意識的な学習が進められると考える。

ここで、学生が記したラーニング・ジャーナルから、具体的な「メタ認知知識」の意識化の例を紹介したい。すなわち、ラーニング・ジャーナルに記された学生の生の内なる声を引用する。内容がほぼ同様とみなされるものはまとめた。記述の後の( )中のFは留学生、Jは日本人学生を表す。尚F、Jの後の数字は個人ナンバーを示す。

① Person Knowledge(情意的、認知的知識)

- ・ もっと積極的にいこう。(F 9)
- ・ これからのコミュニケーションに自信が出てきました。(F 12)
- ・ 自分の考えを持つことが異文化間コミュニケーションには必要なんだ。(J 6, J 8, J 18)
- ・ 今まで、面倒だからやらない、恥ずかしいからやらないと思っていたことに挑戦していきたい。(J 22)

学習の中で表れる喜び、驚き、自信の獲得、学習動機などの要素は、グループ・プロジェクトに関しても多く出された。

- ・ それなりにいい発表ができた。このトピックについてももう少し深めたいと思う。(J 2)
- ・ 今日の発表では、私のできることを精一杯やることができ、満足だ。(J 8, J 19)
- ・ この授業のいちばん勉強できるところ、面白いところはプレゼンの準備や発表だと思う。(F 20)
- ・ プロジェクトで感じた苦労も結局は楽しみとなった。人生に活かしたい。(J 1)

② Task Knowledge(タスクに関しての知識)

タスクはこの場合、異文化間や学生相互のスムーズなコミュニケーションであり、日本語能力や英語力の伸長、そしてグループ・プロジェクトであるが、Wenden(1991)のいうタスクの達成手順やタスクの困難さについての知識が観察された。

- ・ 相手に自分の意図することをうまく伝える難しさを感じた。(J 15)
- ・ 言語の理解度が学生によって違ったのでグループ・ディスカッションを進めるのが困難であった。(J 1)
- ・ 背景が異なる人と仲良くなっても、ちょっとした行き違いで問題も起こってしまいそうなので、相手の文化について気を配っていきたい。(J 12)
- ・ とにかく相手の表情を見ながら、相手の反応を見ながら話し、自分の意見を言うのが

大事だと思う。(J2, J17)

- ・ 誤解が生じた場合には、冷静にして文化が違うから起こったのではないかと可能性を考えるといい。(F10, F12)
- ・ 自分の中で当然だろう、と思っていたことが異文化では通用しないこともあることがわかった。(J16)

グループ・プロジェクトについても方法論や困難さが述べられている。

- ・ 学部、学科の違う人とプロジェクトの準備をするのは時間割があわず、大変だった。(J23)
- ・ 準備の時間が足りなかった。(F2)
- ・ 出身国別の比較だったが、国によっては数少ないサンプルしか集まらなかった。(F2)
- ・ パワーポイントは、やはりグラフを入れて発表した方が分かりやすい。(F9)

語学力に関しては、特に留学生からの感想が多く見られた。以下に代表される。

- ・ 日本人と話していて、日本語が少しずつうまくなっているのがわかる。(F15, F18)
- また、日本人の学生側から次のような気づきも記されている。
- ・ 留学生の日本語が自分たちの英語に比べ、はるかに上手だったことには驚いた。(J3, J9, J15, J19)
  - ・ 留学生を見ていて、このように授業で自分たち日本人と1時間半も話さなければいけない状況下では、語学の上達は早いだろうと思った。(J1)

また、ちょうど「言語コミュニケーション」をテーマとして授業が行われた日の鋭い指摘もある。

- ・ 授業中静かな状態が続いたとき、日本人の一人が「しーん」と言ったが、留学生のみんなはその意味がわからない様子だった。日本語にはユニークな擬音語、擬態語が多く使われていて、改めて文化の違いを感じる。(J5)

### ③ Strategic Knowledge(ストラテジー全般に関する知識)

この分類には、混在授業であるが故に、他者が学習リソースとして認識されている記述がいくつか見られた。

- ・ 留学生が積極的に社会的に話してくれ、とても話しやすかった。(J8, J15, J17)
- ・ 留学生を見ていて、自分もさらに外交的になってコミュニケーションを積極的にしていこうと思った。(J10)
- ・ 同じグループになった留学生から「期待」というのはどのような意味か、と聞かれて簡単な言葉に言い換えようとしても難しいことがわかった。留学生にわかる言葉を探し出し、且つ使えるようになる機会だと思う。(J8)
- ・ マレーシアの留学生と価値観が共有できたとき、無性に嬉しかった。国を越えても価値観を共有できることはたくさんあるのではないかと。(J3)

このJ3の感想は、理論を学ぶと同時に体験学習が行われている中から生まれたものであると解釈する。

グループ・プロジェクトに関しても他者が大いに個人の学びに関与しているのが観察される。

- ・ 発表もチーム内の協力と努力があって作られた。その過程が全て国際交流でしょう。(F1)



- ・ グループ・プロジェクトを通しての日本人と他の外国人との付き合いがすばらしい経験でした。(F8, F14)

上述した①から③の例のように、学生たちが学習を振り返るラーニング・ジャーナルには、さまざまな体験学習を通しての学びが意識化されて記されており、異文化理解のプロセスを具体的に観察することができる。また、ラーニング・ジャーナルが学習者の自律的学習の一助となっている、と言えよう。

#### 4. 4 ラーニング・ジャーナルに見られる体験的異文化理解への第一歩

「異文化間コミュニケーション」の授業で掲げている到達目標は、すでに述べたように、①学生自身の自己モニタリング力を高めること、②異文化間コミュニケーションする力を社会的スキルとして身につけること、の2点であるが、それらは実際に達成されているのであろうか。

まず、学生が自分自身、自文化、自分の物の見方について見つめる力を高めているか否かに関する気づきとして、次のような学生の記述が見られる。特に日本人学生が多くの記述をしている。

- ・ 自分が日本人であることを再認識した。(J14)
- ・ 自分の固定観念の多さに驚いた。(J18)
- ・ 自分の知らない自分、自分が持つ無意識の中での考えなどを少しずつ発見している。(J1, J5, J8, J11, J17, J19, J21, J22, F4, F12)
- ・ 他文化を見たり、聞いたりする前に、まず自分の文化について知っておく必要がある。留学生に自文化について説明できないことで、自分の意識の低さを実感した授業だった。(J9)
- ・ コミュニケーションのためには、自分のことを知ってもらわなければ。少しずつ自己開示を広げて行き、自分も知ってほしいし、同様に相手のことも知りたい。(J3, J17)

日本人学生にこのような内省が多いのは、「この機会がなければ、4年間恐らく話すこともなかった留学生と友人になれたのは貴重」(J8)だと感じる日本人学生が大半であり、異文化に接する機会が乏しいことを示唆している。日本人学生には、自分を客観視し、コミュニケーションの方向性を模索するきっかけが、この授業によって提供されたと言えよう。

また、何より注目すべき例がある。「留学生との混在授業というのに、ヨーロッパからの学生がほとんどいないので正直がっかりした」、「留学生と日本語で話すのは疲れる」、「留学生が一緒だと陳腐な質問が多い」(J19)と第1週に述べていた学生が、前期半ばには、「今まで自分が留学生に対して失礼な見方をしていたのがわかった」や「人との話し方を学べた気がする」(J19)と、自分自身を見つめ直し、「この授業が終わるのはさびしい。本当にどうもありがとうございます。」(J19)と最終週に述べている。一人の学生の、異文化からの学生に対しての内的成長が見られ、授業参加が個人の見方、価値観をも変え得る学習過程であったことが伺える。

到達目標の②「異文化間コミュニケーションをする力の習得」については、参加学生の多くが、「大学の中で、いながらにして本当の異文化間コミュニケーションができた」(J

1, J 17他)と述べており、「驚きと発見の連続」(J 16)の14週間に、「異文化理解に必要なスキルを身につけることができた」(J 2)と感じている。しかし、「異文化間コミュニケーションと言っても人付き合いの延長である」(J 6)し、「文化的な違いもたくさんあるが、人と人との関わりあいであるので、相手を思いやり、尊重することが大切である。」(J 8)とも述べている。留学生の多くは、体験活動を通して、「文化差ももちろんであるが、個人差も、コミュニケーションでは大きな変数ではないか。」(F3, F4, F20, J3, J15, 他)と記している。また、「若い世代は移動も激しく、順応も早いので、文化差も薄まってきているのではないか。コミュニケーションが徐々にし易くなっていくかもしれない。」(J 15)とのコメントも、留学生との密な異文化理解活動だからこそ、出された見解であろう。

#### 4. 5 ラーニング・ジャーナルに対する教員の評価

本稿ではラーニング・ジャーナルによって得られた参加者の意識化された内なる声を考察したが、このラーニング・ジャーナルのもうひとつの側面として、教員と学生の間には何らかの信頼関係を形成していた点が評価できる。教員からのフィード・バックは決して長くはないが、ラーニング・ジャーナルでは聞き手は教員一人である気安さからか、口頭では容易に言えぬことについても、学生は自由に心の内を語り、対話を求めている。授業の内容に関する質問や意見を交換する場と見ていた学生もいる。その場合、学生は、教員のフィード・バックを学習リソースや情報獲得リソースとして見なしている。また授業と授業の合間の1週間、参加型の体験学習を振り返り、日常生活の中で経験した具体的な気づきの喜びや驚きを記す学生もいる。言語が日本語と限定されていなかったのも、非漢字圏からの学生に自由な記述を促したようだ。学生の個性や新しい側面が見え、教員側にとっても有意義な体験であった。

倉地(1991)が指摘するように、ラーニング・ジャーナルは必ずしも科学的、分析的な異文化理解を志向するものではない。また、今回の参加学生の中にも見られたが、「書く」という作業を億劫と感じ、それが得意な自己表現法ではない場合もあろう。その場合にはラーニング・ジャーナルと組み合わせてインタビューを行ったり、他のアプローチを併用することも望まれる。

#### 4. 6 授業「異文化間コミュニケーション」の意義と今後への課題

本節では山梨大学留学生センターの「異文化間コミュニケーション」で取り入れているラーニング・ジャーナルを通して、参加学生の学びの意識化を観察し、異文化理解がいかに行われているかを考察した。授業に参加し、教室にいること自体、異文化間コミュニケーションをせざるを得ない状況下で、学生たちはさまざまな体験や教室活動を共有しながら、タスク遂行の困難さを認識しながらも、認知的知識やメタ認知知識を使い、学びを活性化させている様子が観察できた。自己モニタリングをしながら、異文化間コミュニケーション力習得に向けてメタ認知知識を活用している例が多数見られ、授業の到達目標はほぼ達成されていると考えられる。每期、参加学生のラーニング・ジャーナルや授業評価に記された授業に対する学生の意見をもとに、工夫を加えながら授業内容の構成や教室活動などを検討し直しているが、グループ・プロジェクトとラーニング・ジャーナルのより適正な成績評価方法も、今後の検討事項である。また、これからもラーニング・ジャーナルを採

用していく所存であるが、ラーニング・ジャーナルに表れた学生の内的な成長を縦断的に観察し、その意義を改めて考察したい。

また、学生にとっては、この授業体験を一時的な異文化体験に終わらせないような、継続的な異文化理解活動が望まれる。更なるスキル・アップを目指す異文化トレーニングの科目を開発するのも一案であろうと思われる。そのほかに、前述したディスカッション・グループ「話そう会」と連動させ、学生主導型の異文化理解活動の機会を増やすことによって、留学生と日本人学生の混成コミュニティの中から、さまざまな共同活動の気運が自発的に高まるのを願って止まない。

## 5 ま と め

第2節で取り上げた「日本人学生が参加する日本語授業」では、日本人学生は、初級日本語を学ぶ留学生に生の日本語によるコミュニケーションの場を提供し、同時に、留学生の発表を聞いて異文化に触れるが、それだけではなく、自らの日本語使用を振り返るきっかけをここで得ている。インタビューに答える際、日本人同士、仲間同士で話していたときのように、聞き手との共通の知識を土台に、多くを言語化しなくても通じる、ということは、ここでは通じない。異文化を背景に持ち、かつ、日本語についても初歩の知識しかない相手に対して、どのように話せば言いたいことが伝わるのか。この交流は、留学生が学習している日本語を運用することが一つの目的だが、一方では、日本人学生が自己の日本語をモニターし、構成し直ししながら、コミュニケーション能力を高めていく機会ともなっている。

第3節「異文化交流会」のレポートからは、留学生の疑問を聞くことによって、日本人学生が改めて日本語の使い方について振り返ったり、ともに普段無意識でしているジェスチャーについて考えたりすることができた等、双方の参加者にとって、さまざまな事柄を意識化するチャンスだったことがわかる。また、高校生対象のオープン・キャンパスでは、学生たち自身が交流会を企画・運営する立場になり、異文化が海外との間のみならず、地域・世代・個人の間にも存在することを高校生に意識してもらう、という成果を体験している。

第4節「異文化間コミュニケーション」では、授業の到達目標に「学生自身の自己モニタリング能力を高めること」と「異文化を広いフレームのなかでとらえ、スムーズにコミュニケーションする能力を身につけること」の2点を掲げている。授業の内容は、仮想場面でどう考え、行動するかを考えることに始まり、理論の講義、ディスカッション、ロール・プレイ、インタビューなどの活動へと続くが、学生は、ラーニング・ジャーナルを書くという作業を通じて、学習に関する認知プロセスを内省する機会を得る。そこでは、例えば、「自分の考えを持つことが異文化間コミュニケーションには必要」という認知的知識、「誤解が生じた場合には、…文化が違うから起こったのではないかと可能性を考えるといい」といったタスクの達成手段についての知識、「留学生にわかる言葉を理解する、且つ使えるようになる機会だ」のようにストラテジーに関する知識を得、学びが意識化されていることが分かる。また、自己を客観視し、異文化間コミュニケーションのスキルを身につけることができた、という多くの記述から、到達目標は達成されたと言ってよいのではない

だろうか。

以上、交流活動の3つの事例を、参加者の気づきという共通の観点から考察した。各々の活動は、今後も引き続き、あるものは多少形を変えながら行われる予定であるが、本報告でのまとめを土台に、さらに充実した活動へと発展させていければと考えている。

- <sup>1</sup> 山形大学留学生センターでは、日本人学生の参加による日本語授業の他に、留学生支援のボランティア活動も行っている。このほか、山形県内の9大学によるコンソーシアム山形(ゆうキャンパス05-夏の山形学校 in 飛鳥)、山形大学主催のエリアキャンパスもがみ(やってきました大学祭-交流ゾーン「外国人留学生による料理教室」)、山形大学フェア in 白い森の国おぐに(留学生による母国料理の紹介コーナー)に留学生が参加している。地域との交流としては、お祭りやイベントに留学生が参加している他、宮沢中学校(山形県尾花沢市)の中学生と本学留学生との交流が継続的に行われている。また、コロラド州立大学生と本学学生(日本人学生及び留学生)との交流も今年度より始まり今後継続する予定である。
- <sup>2</sup> ネウストプニー(1995)
- <sup>3</sup> 初級は「文法」8コマ、「復習」「読む」「書く」「聞く」「話す」「漢字」各1コマ、「日本文化」2コマの合計16コマから成る。
- <sup>4</sup> 中級は「総合」4コマ、「読む」「書く」「漢字」各1コマ、「日本文化」2コマの合計9コマから成る。
- <sup>5</sup> 各期の研修生は、第1期：初級1名、第2期：初級4名、第3期：初級5名・中級7名、第4期：初級6名・中級8名である。
- <sup>6</sup> 園田・中村・奥村(2004)における奥村圭子執筆部分(43-47頁)のディスカッション・グループを参考に構想したものである。
- <sup>7</sup> 中村・園田(2005)参照。
- <sup>8</sup> 日本人学生は異なりで6名参加した。これをJ1~J6で表す。JはJapanese Studentの略。
- <sup>9</sup> 留学生は異なりで2名参加した。これをF1~F2で表す。FはForeign Studentの略。
- <sup>10</sup> 水谷修・水谷信子(1988)、ジャパントタイムズ刊。
- <sup>11</sup> 80-81頁は、三井はるみ執筆項目。
- <sup>12</sup> 飛田良文編(2001)、おうふう刊。
- <sup>13</sup> 村野良子執筆。
- <sup>14</sup> 留学生の感想には当例以外にも文法・表記上の間違いがあるが、そのままにしてある。
- <sup>15</sup> 前半は日本語教育学の基礎についての講義を行った。
- <sup>16</sup> 教育学部所属学生10名、人文学部所属学生26名が受講している。
- <sup>17</sup> 人文学部の学生が主に企画・運営し、教育学部と人文学部の学生が補助をする形になった。改組をしたため、1年次の学生は地域教育文化学部所属であるが、2年次以上の学生は教育学部所属である。
- <sup>18</sup> 異なりで8名の学生が参加したが、レポートはみつつの題目からひとつを選択する形式にしたので、1名は別の課題に取り組んだ。

- 19 学外の参加者が異なりで7名になった。これをS 1～S 7で表す。全員学校関係者であるため School の頭文字を使用することとした。
- 20 東北方言と若者言葉(新方言)を載せたもので、司会学生が作成したオリジナルの資料である。
- 21 交流会の手順を詳細に記したもので、司会学生が作成したオリジナルの資料である。
- 22 「話そう会」については、園田博文・中村朱美・奥村圭子(2004)「ケーススタディ異文化理解—文部科学省平成15年度地域貢献特別支援事業の活動事例等3例を中心に—」『佐賀大学留学生センター紀要』第3号：33-48に詳しい。
- 23 土屋(2000)は、「多文化クラス」を「様々な文化背景を持った学生が参加し、異文化理解について学ぶクラス」と定義している。
- 24 ジャーナル・アプローチとは、ラーニング・ジャーナルを使った教授法である。倉地(1991)は、従来の教育では、コミュニケーションの技術面や表層構造、とくにその目的文化を背景とする人々が要求する、あるいは望ましいとする意思疎通の技術をいかに獲得するかということに最大の注意が払われてきたのではないかと見ており、それに代わる教育活動として、自己表現の拡大と異文化接触の深化とを目指すジャーナル・アプローチを提唱している。
- 25 形成的評価は学習指導の質的な管理といえ、学習者の学力、また学びの変化をモニターするものと解釈する。

## 参 考 文 献

- 倉地暁美(1991)「異文化コミュニケーション能力開発のために—ジャーナル・アプローチの創出とその意味」『異文化間教育』5. アカデミア出版会：66-80.
- 国立国語研究所編(2005)『新「ことば」シリーズ⑧伝え合いの言葉』国立印刷局.
- 園田博文・中村朱美・奥村圭子(2004)「ケーススタディ異文化理解—文部科学省平成15年度地域貢献特別支援事業の活動事例等3例を中心に—」『佐賀大学留学生センター紀要』第3号：33-48.
- 田崎敦子(2003)「日本人学生の異文化間コミュニケーション能力の養成—英語を共通言語として行う留学生とのグループワークを通して」『留学生教育』7号：45-53. 広島大学留学生センター.
- 土屋千尋(2000)「多文化クラスの大学間および地域相互交流プロジェクトの実施と評価に関する研究」『平成9-11年度科学研究費補助金基盤研究(C)(1)研究成果報告書』.
- 徳井厚子(2002)『多文化共生のコミュニケーション—日本語教育の現場から』アルク.
- 中村朱美・園田博文(2005)「留学生と日本人学生の混在授業における異文化理解教育—日本文化研修と異文化交流会での試み—」『佐賀大学留学生センター紀要』第4号：33-48.
- J.V.ネウストプニー(1995)『新しい日本語教育のために』大修館書店.
- 八若壽美子(2004)「活動中心の授業における評価—自己評価・ピア評価の有効性—」『茨城大学留学生センター紀要』2号：13-24.
- 細川英雄(1999)「日本語文化総合のめざす世界」細川英雄(編)『日本語教育と日本事情—異文化を超える』明石書店：121-149.

- Dickinson, L. (1992) *Learner Autonomy 2 : Learner Training for Language Learning*. Dublin : Authentik.
- McCrindle, A. and Christensen, C.A. (1995) The Impact of Learning Journals on Metacognitive and Cognitive Processes and Learning Performance. *Learning and Instruction* 5 : 167–185.
- Mead, R. (2005) *International Management : Cross-cultural Dimensions*. London : Blackwell.
- Wenden, A.L. (1991). *Learner Strategies for Learner Autonomy*. Hemel Hempstead : Prentice Hall International.

## Summary

**SONODA Hirofumi, OKUMURA Keiko, UTSUMI Yumiko, KUROSAWA Akiko :**  
**A Perspective gained from the observation of exchange activities**  
**between international and Japanese students :**  
**for developing inter-cultural communication competence through ‘awareness’**

This paper is a practical report on three exchange activities concerning inter-cultural communication. First we present a case of Japanese language classes for international students at Yamagata University which Japanese students participated in. The Japanese students wrote in their reports that it had been an opportunity for them to take a close look at their own language through the activities such as asking questions to international students as an audience of presentation, and answering questions in an interview. Next, in the section reporting the meetings of Inter-cultural Exchange at Yamagata University, it is observed that the discussions on such things as greetings, nonverbal communication, dialect, colloquial speech of young people, and children's games provided a spark for both international and Japanese students to become aware of and to think about what they had rarely been conscious of. Lastly, the report on the Inter-cultural Communication course for both international students and Japanese students at Yamanashi University discusses how the students' awareness and reflection regarding the learning objectives and processes were encouraged, and in what way meta-cognitive knowledge-Person knowledge, Task knowledge and Strategic knowledge, was activated and enriched their active learning through writing a learning journal. Furthermore, it examines how the course objectives of developing self-monitoring skills and of acquiring inter-cultural communicative competence were attained.